

第一章 空蟬の物語 逢坂関での再会の物語

[第一段 空蟬、夫と常陸国下向]

*伊予介といひしは、*故院崩れさせ(こみんかくれさせ、故院が御隠れなさり)たまひて、またの年(あそばした翌年に)、常陸になりて下りしかば、かの帚木(ははきぎ)も誘はれにけり(いざなはれにけり、率いられて行きました)。*地方官の「国司(こくし、くにのつかさ)」の等級は、首席の長官が「守(カミ)」で、次席の次官が「介(スケ)」で、三席の判官が「掾(ジョウ)」で、四席の佐官が「目(サクワン)」、とのこと。ただし、親王家への年俸名目で親王を「守」に任じた親王任国(しんわうにんこく)には国守の親王自身(=太守)は任地へ赴かず、「介」が現地総指揮官を務めた。現地総指揮官とは、「受領」のことである。「受領」は一定額を中央に納税した後は、自分の采配で蓄財できた。つまり、農産物は地面で作るので財は現地に在るのであり、生産性の工夫が図れば増産が見込めた。灌漑や道路整備や品種改良が大きく進んだ時代だったのである。伊予介は上国(じゃうこく)の伊予(愛媛)から大国(たいごく)の常陸(茨城)の次官に出世しただけでなく、「常陸国」は上総・上野とともに親王任国なので、常陸介は実質の長官「守」である。*注に<桐壺院の崩御は「賢木」巻の源氏二十三歳の年。その翌年、朧月夜の君は尚侍になり、朝顔の姫君は齋院となり、藤壺宮は出家した。「帚木」という呼称は巻名に因んで呼ばれたもの。作者の命名。読者は「空蟬」と呼称する。>とある。ざっと5年程前のこと。

須磨の御旅居も遥かに聞きて(その二年後に伊予介の奥方である帚木は、光君が須磨の御旅路に在る事を遠く耳にして)、人知れず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど(人知れず心配申し上げないでもなかったが)、伝へ聞こゆべきよすがだになくて(御手紙を差し上げる手立てすらなくて)、*筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地して(つくばねのやまをふきこすかぜもうきたるこちして、筑波おろしも頼り無く)、いささかかの伝へだになくて(一通の遣り取りもないまま)、年月かさなりにけり(年月が過ぎたのでした)。*注に<「甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや言つてやらむ」(古今集東歌、一〇九八)を踏まえ、「甲斐が嶺」を「筑波嶺」と言い換えた。>とある。「かひがねをねこしやまこしふくかぜを」は山並みを渡る風を感じさせる音韻で、「ひとにもがもやことづてやらむ」の「もがもや(〜であったなら)」にもどかしさが良く出ている。言葉を歌にする面白さを素直に理解できる歌かと思うが、子供っぽい感じもする。でも、それも悪くない。

限れることもなかりし御旅居なれど(いつ終わるとも知れない流浪の旅路だったが)、京に帰り住みたまひて、*またの年の秋ぞ(光君が京に帰り着きなさった翌年の秋に)、常陸は上りける(常陸介は任期を終えて都に戻り上がって来ました)。*注に<『完訳』は「国守任命後、足かけ五年目に辞任、六年目(源氏帰京の翌年)に上京。滯標巻後半に相当」と注す。>とある。この年の秋といえば、光君は住吉詣でで明石の君と回り逢いというか、鉢合わせと言うか、すれ違いというか、をしたが、この話は九月末の最晩秋と後述されているので、住吉詣での後の事らしい。

[第二段 源氏、石山寺参詣]

*関入る日しも(せきいるひしも、その常陸介一行が京の手前の逢坂の関を越えようという折りしも、ちょうど同じ日に)、この殿(内大臣殿も)、*石山に御願果しに詣でたまひけり(大津石山寺に生還の御礼参りにお出掛けなさいました)。*「関」は一般的には国境だが、此処の「関」が逢坂関(あ

ふさかのせき)を示す文意は、「逢坂関」が当時の首都圏である畿内管理に於いて、諸国である東山道および東海道との関門所であった事に起因する。東海道の東の果ての常陸国から都へ帰る、正にその地点として遂に「関入る」と語られる。また、そうであればこそ出迎えるべき場所である。*石山寺は天津の東南、琵琶湖の南端近くに在す。しかし、「石山に御願果し」詣で給う根拠は特に語られていない。住吉神に対しては、例え拗じ付けであろうと、その人智を超えた導きで生まれ変わった、という奉るべき因縁が説かれていたが、石山寺の観音菩薩は個人の思索は超えるかもしれないが人類の叡智ではありそうで、感謝の対象ではあっても崇拜の対象ではないような印象さえある。尤も、光君が現世の廻り合わせに感謝するのは自由だし、清水よりは渋い石山の観音さんに御参りする風情は当時の宮廷人読者に好感されたようにも想像する。その風情が逢坂関と石山寺の近さという設定に臨場(したい)感を与えていたのだろう。石山詣では空蟬の関迎えをする口実だと光君自身から語られるが、空蟬の関迎えがこの情景描写をする作者の口実では無いかと、読者は思ったかも知れない。

京より、かの紀伊守などいひし子ども、迎へに来たる人びと(都から以前に紀伊守などといった息子たちの迎えに出て来ていた者たちが)、「この殿かく詣でたまふべし(内大臣殿が石山詣でで此処を御通りになる事になっています)」と告げければ(と帰京の一行に告げたので)、「道のほど騒がしかりなむものぞ(道がさぞ混雑することだろう)」とて(から早く関を越えてしまおうと)、まだ暁より急ぎけるを(常陸介一行はまだ朝の暗い内から帰宅を急いだが)、女車多く(女衆を乗せた牛車の多い編成で)、所狭うゆるぎ来るに(道いっぱい広がってゆっくりと進んだので)、日たけぬ(関を越す前に日が高くなってしまいました)。

*打出の浜(うちでのハマ)来るほどに(くるほどに、を通過すると)、「殿は、*粟田山(あわたやま)越えたまひぬ」とて、御前の人びと(ごぜんのひとつと、内大臣殿の先払いが)、道もさりあへず来込みぬれば(道では避けきれないほど多勢で遣って来たので)、*関山に皆下りゐて(常陸介一行は関所の溜まりに止まって)、ここかしこの杉の下に車ども搔き下ろし(かきおろし、長柄を牛から外して停車させ)、木隠れに居かしこまりて過ぐし奉る(すぐしたてまつる、内大臣行列を待って御通し申します)。*現在の滋賀県大津市打出浜は確かに琵琶湖畔の地名だが、当時は東海道が淡海の湖畔街道だったのではないだろうか。打出浜を抜けると直ぐ関所があったかのように語られるこの物語から逆推して臨場感のある「打出浜」を見当付けるなら、打出中学校付近(というか市民病院)かもしれない。そして、「逢坂山下」が逢坂小学校あたりだろうか。*「粟田山」は注に<京都と山科との間の山>とある。三条から東山方向蹴上(けあげ)手前に粟田神社があり、ほぼその辺りの地名が粟田口。今の三条通はそのまま山科の先の四ノ宮で東海道と合流する。そして東海道は逢坂関所跡の石碑が建つ大谷駅前へと続く。と、今の道付けとほぼ符合する。逢坂山下から常陸介一行が大谷に着く時間と、「粟田山越えたま」うた内大臣が山科から大谷に着く時間とは、同じくらいの設定と考えると良さそうだ。*「関山」は関のある山ということなら逢坂山だが、此処では正に<関所の場所そのもの>で、その吟味控え用の溜まり場に「皆下り居」した、ということになる。山道は逃げ場がないから関所を設ければ人と物の往来を制御できる。特に、車およびそこに積んだ多くの物資を取り締まるには最適だ。それだけに上下共に道幅いっぱいの行列が道上で向かい合えば、互いに遣り過ごせないで立ち往生の大混乱となる。全責任は下位の者が負うのである。下位の者が関所溜まりで控えるのは当然だ。

車など(荷車の内)、片方は後らかし(かたへはおくらかし、一部は後から運ばせ)、先に立てなどしたれど(一部は先に送ったりしたけれど)、なほ(それでもなお)、類広く見ゆ(るいひろくみゆ、多くの車を擁する編成の常陸介一行でした)。

車十ばかりぞ(くるまとをばかりぞ、杉木の下に停車した車の十台ほどの簾の下から女たちが覗かせ出した)、袖口、物の色あひなども、漏り出でて見えたる、田舎びず、*よしありて(品があって)、齋宮の御下り何ぞ様の(なにぞやうの、か何かのような)折の物見車思し出でらる(おぼしいでらる、思い出されます)。*「由ある」は幅のある言葉で、時には<由緒正しい、品がある>だったり、<風情がある、気が利いている>だったり、<方法がある、役に立つ>だったり、<理由がある、口実が付く>だったり、する。しかし当時の人はそれぞれの場面で、その意味する厳密な定義よりは、文脈上で具体的な何かを感じ取って読み進んでいたような気がする。例えば此处なら、実際の着物の柄や色合いが目には浮かんだに違いない。

*殿も、かく世に栄え*出でたまふ*めづらしさに(殿のこの御栄達をお示しなされる輝かしさのままに)、*数もなき(普通には見ないほどの数をなしていた)御前ども(ごぜんども、前触れの者たちも)、皆目とどめたり。*「殿も」と書き出されると私などは思わず強く読み出して、この文を難文に見做してしまう。しかし、講釈師なら「殿もかく世に栄え出でたまふめづらしさに」までは、低く語るだろう。そして「数もなき御前ども皆目とどめたり。」と強語する。それでも、やはり例の、共通の制約認識を持つ内部の者にとっては凝縮された力強い表現であり、外部には暗号化する、という古文の特性もありそうだし、作者の恐らく当時としては分かり易い言い回しの妙が、今となってはさらにややこしさを加えているウラミもありそうだ。*「出で給ふ」は「栄え出で(栄達する)」であり、「出づ目愛らしさ(示す輝かしさ)」でもある。*「めづらしさに」は<輝かしさとして>であり、<見慣れないほどの「数もなき」>でもある。*「数もなき」は<「数(大量)」「も(‘を’の強意)」「なき(‘成す’の連用形容形)>。この「なき」は形容詞「無し」の活用と紛らわしく、一見「数も無き(幾らも居ない)」と勘違いする。此处に、古文がより一般化を許容できない限界故に廃れた一面、を見る思いもする。

[第三段 逢坂の関での再会]

九月晦日なれば(ながつきのつもごりなれば)、紅葉の色々(紅葉の鮮やかな赤や黄が)扱き混ぜ(こきませ、落ち混じって)、霜枯れの草むらむら(霜枯れでやせた疎らな草むらが)をかしう見えわたるに(風情豊かに広がる関所前に)、関屋より(内大臣の御到着を聞いて番屋から)、さとくづれ出でたる*旅姿どもの(どっと一斉に出て来た常陸介一行の者たちの)、色々の*襖の(色とりどりに被り上着に)つきづきしき縫物(飾り縫いした刺繍や)、括り染めのさまも(染めの絞り具合も)、さるかたにをかしう見ゆ(それぞれに趣向が在りました)。*[旅姿(たびすがた)]という言い方は常陸介一行の服装かと思う。注にはこの文を<源氏一行の人々の動きを活写。>とあるが、大臣と同行の者どもが番屋で控えているとは考え難い。番屋の役人にしても、内大臣のお通りを前に外で待たない筈も無い。唯一、旅の一行なら一服していても不思議では無いだろう。*「襖(あを)」は脇を縫っていない上着とあり、動きやすい貫頭衣だったらしい。頭を出して被るだけなら、ポンチョみたいなものかと思うが、一枚布の中開けではなく、二枚布を中開けで縫い合せた物、との事。

御車は簾下ろし給ひて(みくるまはすだれおろしたまひて、内大臣は車の簾を下ろしなされたままで)、かの昔の小君、今、*右衛門佐なるを召し寄せて、*「右衛門佐(うゑもんすけ)」は注に<従五位上相当官>とある。「佐すけ」は次官だが、衛門府(ゑもんふ)は帝護衛の近衛、政府警護の兵衛、に次ぐ役所警備の職掌で格下ではあったらしい。「今」とあるのは、光君による拔擢人事の賜物を意味するか。しかし、此处の記述では右衛門佐は常陸介一行の一員で有るかのような話の運びだ。よく事情がつかめない。光君の関所到着もそうだが、せめてほんの数行もう少し事情説明が欲しい。

「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ(今日の御出迎えにあがったこの思ひは、姉君もお見捨てにはなさるまいな)」などのたまふ御心のうち(などと仰る光君の御心の内は)、いとあはれに(とても感慨深く)思し出づること多かれど、*大雑にて甲斐なし(おほぞうにてかひなし、概して言えば実りの無いものでした)。*「おほぞう」はくとおりにっぺん。いいかげん。>と辞書にあり、初め私はその雑な語感からこの文を<一括りには出来ない>という意味かと思った。しかし、前節に「多かれど(多かったが)」とあり、<一括りには出来ない>ことは自明の事と知れる。そこで改めて読み直すと、「大雑には」ではなく「大雑にて」と書いてある。ということは、「多かれど大雑にて甲斐なし」なのだから<多かったが一括りにすると無駄だった>のだ。確かに、光君の空振りは多かった。

女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへして、ものあはれなり(一頻り感慨に耽ります)。

「行くと来とせき止めがたき涙をや、絶えぬ清水と人は見るらむ (和歌 16 - 1)

「行きも帰りも泣く訳を、知るのは関の清水だけかと (意識 16 - 1)

*「ゆくくと(行きも帰りも)せきとめがたきなみだをや(逢坂関で堰き止められない私の涙を)たえぬしみずと(関でも止まらないとは此処の清水と同じだと)ひとはみるらむ(人は上辺だけを見て言う事でしょう)」という、掛詞に寂寥感を織り込んだ歌か。注に<空蟬の独詠歌。「塞き止め難き」に「(逢坂の)関」を掛ける。「清水」は歌枕「関の清水」。『完訳』は「源氏にも理解されない孤心を形象」と注す。>とある。「関の清水」は<滋賀県大津市逢坂の関跡付近にあった清水。[歌枕]>と大辞林にある。

え知りたまはじかし(殿はご存知ありますまい)」と思ふに、いとかひなし(本当に遣る瀬無い)。